

X-15 K 39 遺跡工学部共用実験研究棟地点 8 b 層出土後北 C₂-D 式土器の位置付け

松田宏介（室蘭市教育委員会）

a. はじめに

K 39 遺跡工学部共用実験研究棟地点 8 b 層からは、本報告書で既に記載されたように、続縄文期の土器群が検出された。それらの多くは、後北 C₂-D 式から円形・刺突文土器群（鈴木 1999；2003）に属する資料である。

これらについては、河野広道による「後北式」「北大式」の土器型式の設定（河野 1933；1959）以来、編年・型式内容をめぐり様々な議論が重ねられてきた（大沼 1982、高橋正 1984 ほか）。近年に至っても編年案の検討や土器群の構成、個別資料の位置付けなど、様々な検討がなされている（鈴木前掲、熊木 2000；2001、榎田 2009 ほか）。

以下では、報告された後北 C₂-D 式の深鉢 1 個体を基に、編年的位置付けや研究状況について検討を加えたい。適宜併せて報告文・図面等を参照されたい。

b. 記載

(1) 成形

器形 平底。器壁は底部からやや内湾気味に立ち上がる。胴部半ばがやや張り、口縁部がややくびれる。

胎土 胎土には、粗砂・レキのほか、海綿骨針が観察される。レキは、径 5 mm 程度で円磨されたものは少ない。また、器表面に長さ 5 mm 程度の空隙がいくつも観察され、植物質と思われる纖維も一定程度含まれていたようであるが、意図的な混和材であるか確認はない。

底部の製作 製作手法の詳細は明らかにできない。後北 C₂-D 式の底部製作については、底部粘土板をはめ込む手法が K 39 遺跡体育館地点出土資料で指摘されているもの（林 1988：26）、本例では確認できない。ただし、二枚橋式（伊東・須藤編 1982：38）や恵山式（吉崎ほか編 1979：154、松田・青野 2003：97）で観察されるものとは異なり、底部粘土板から器壁の立ち上がり部分には擬口縁が観察されない。底部粘土板の準備から器壁の積み上げに移る工程において、作業の中斷時間が明らかに異なると推測される。

器壁の成形 器壁成形手法の全容は不明であるが、内傾した擬口縁が胴部半ばで観察される。粘土紐の輪積み

であろう。

器厚 器厚は、口縁部から 5 cm 下位の箇所で 7.5 mm である。

札幌市 K 135 遺跡 4 丁目・5 丁目地点（上野・加藤編 1987）出土の後北 C₂-D 式の資料を同様に計測すると、器厚の値は 6 mm 程度でピークを示す（高倉・松田 2009：4）。このことからすると本例はやや厚手の個体と言える。

口唇 端部は内傾した面を形成する。端部の内傾面は強いナデによるもので、わずかに凹みを呈する。口唇内肩には内面側へのマクレカエリが観察され、内面の器面調整後に口唇が整えられたことを示している。外肩は尖り気味で、キザミが施される。キザミは幅 1 cm に 3 つ程度のピッチで施されているが、遺存状態が悪く作業単位はよく把握できない。

口縁部突起 口縁部には突起がつくられる。資料の遺存状態やゆがみから検討の余地があるが、おおよそ口縁に 4 単位を基本に割付けられている。ただし、4 単位を構成している横側の突起 2 箇所は、本例ではほとんど目立たない。また、実測図正面に対向する箇所では、さらに両側に小突起が 1 つずつ作出されており、3 つの突起で一組をなす（図 178）。このため上面観がややゆがんでいる。

(2) 器面調整、文様、使用痕跡

内面調整 内面では、ヘラナデののち、ユビナデが施される。概して丹念なものではなく、特に胴部上半から口縁部内面にかけては、平滑に整えられず粗雑な印象を受ける。ヘラナデには、端部が 1.5 cm 程度の工具の痕が観察される。調整の方向は、底部付近では横位から斜位、胴部半ばでは斜位、胴部上半から口縁部付近では横位となる。



図 178 上面観と口縁部突起の対応



図 179 補修孔の計測位置

表 133 補修孔一覧 (単位: mm)

	形態	$\phi 1$ 外側径	$\phi 2$ 外側径	$\phi 3$ 内側径	$\phi 4$ 内側径	穿孔方向	部位
孔 1	円筒状	6.7	4.5	2.8	8.3	外面→内面	口縁部, 外面左側
孔 2	円筒状	—	4.8	—	7.6	外面→内面	口縁部, 外面右側
孔 3	円筒状	6.5	5.0	4.0	6.9	外面→内面	胴部下半

外面調整 外面の器面調整は、その後の文様施文により改変がなされている。無文の箇所では、ナデによりおよそ平滑に整えられており、一部光沢を呈する。胴部下半、特に底部付近では調整がやや粗く、縦方向のヘラナデの痕がうかがえる。また胴部上半の縄文施文箇所の空隙では、縦位～斜位の擦痕がわずかに観察される。文様施文に伴うものであろうか。

縄文 長条縄文（林 1988）により、原体を施文方向に対し斜位に維持し回転させ、条と施文方向を一致させモチーフを描いている。原体は 2 段撲 RL, 0 段多条（山内 1979）と思われるが 0 段の数は判別できない。

微隆起貼付 細い粘土紐を器壁に貼り付け、両側をナデつけて稜を形成し微隆起を作り出している。一部では剥落が認められる。長条縄文の両側縁に沿いモチーフを

構成するのが一般的であるが、本例では口縁部外面に横位に 1 条施されるのみである。胎土は、器壁を形成するものと同一である。

刺突 刺突は、長条縄文により描かれたモチーフの両側に列状に施される。圧痕にササクレなどの痕跡は観察されなく、先端を削り出した棒状工具によると思われる。器壁に対しほぼ垂直に工具を当てており、粘土のマクレカエリも少ない。おおむね 1.3~1.6 cm を一つの作業単位として、4~5 回程度連続して施文する傾向がうかがえる。口縁部付近では、刺突が胴部下半に施されたものに比べ、より大きく深い傾向が見て取れる。施文時の土器や工具の保持方法によるのであろう。

意匠と構成 長条縄文により、横位や斜位の直線・弧状が描かれ、それらの組み合わせによりモチーフが形成され、刺突列が沿う。

文様帶の構成は、胴部上半と下半で大きく二分される。胴部上半では、上下を横位の長条縄文により区画し、区画された間に鋸歯状モチーフを連続して描く。鋸歯状モチーフの空隙に、さらに横位の直線ないし弧状のモチーフが充填される。胴部下半は無文帶となる。

胴部上半では、鋸歯状モチーフが 3 単位描かれる（図 85-35 拓影）。実測図正面の箇所以外には、口縁部突起との対応は見られない。また鋸歯状モチーフの間隔も均等ではなく、正面に対応する单位の両側と、残りの 2 単位間のそれとでは、後者が明らかに狭くなっている。当初から 3 単位を意識してモチーフを割り付けたものではな



図 180 上面



図 181 口縁部～胴部上半（目盛り：5 mm）

い可能性がある。

補修孔 補修孔と思われる焼成後穿孔が、口縁部に対をなし2孔と、胴部や下位に1孔確認される。いずれも外面から穿孔されている。内外の口径差が少なく、断面がすり鉢状をなさない(図179、表133)。先端が均一な太さの工具によるものと思われる。口縁部の2孔は、同時期・同一工具によると推測されるが、胴部のものについては不明である。

色調・炭化物 色調は赤褐色～橙色を呈する。底部外面は二次被熱により赤みが強い。内外面ともに、おおむね口縁部から胴部上半にまだら状にススが付着し、黒褐色を呈する。ススは補修孔内面には付着しておらず、補修孔穿孔後は煮沸具以外の用途に用いられたことを示している。

c. 編年的位置付け

後北式は、その設定の当初から貼付文の発達度合いにより編年がなされた。その後、調査例・資料の増加に伴

い、貼付文以外の属性も利用して編年の細分がなされ、近年では文様割付け原理などの検討もなされている。道内で最も精力的に検討がなされてきた土器群の一つと言えよう。

しかしながら、編年的指標として利用しやすい属性に注目し検討がされる一方、一時期一地域の土器群全体の理解という点で、未だ検討の余地があるのも事実である。例えば口縁部の粘土紐貼付は、札幌市K135遺跡(上野・加藤編1987)の層位的検出例から2条をもつ個体の比率がより新しい段階では増加することが明らかにされた。また研究的に北大式の指標とされた口縁部の突瘤文は(齊藤1967)，その後、後北C₂-D式の後葉から見られることが指摘された(石附1976, 田才1983など)。しかしどちらの属性においても本例のように該当しない個体は一定程度存在しており¹、土器型式を「単相組成」(林1990b)とする理解は到底成り立たない。

本例は編年にどのように位置付けられるであろうか。口縁部に見られるくびれは、後の円形・刺突文土器

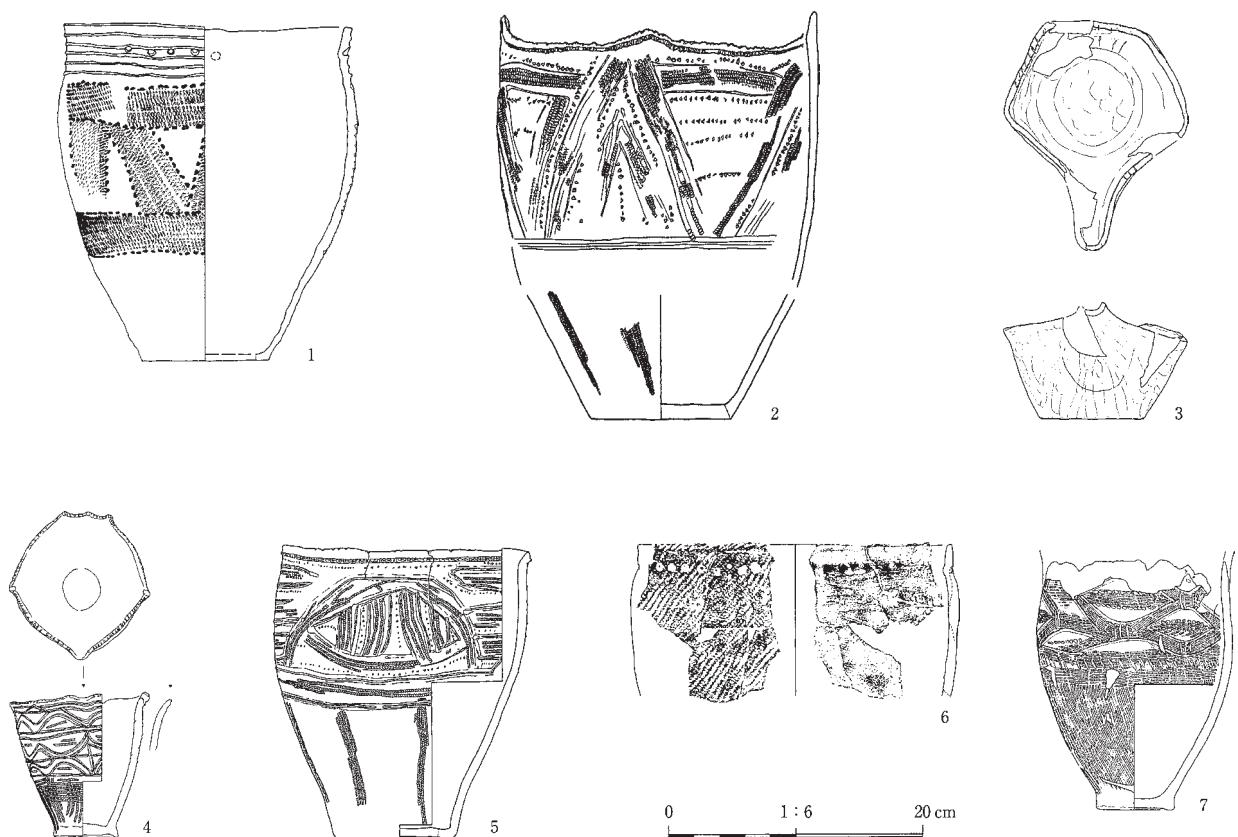


図182 本論関係資料

[1: K39 ポプラ並木東地点(吉崎・岡田編1987), 2: K39 体育馆地点(吉崎・岡田編1988), 3: ユカンボシC15(財団法人北海道埋蔵文化財センター編1998), 4: 旧豊平川右岸(松田2004), 5: トコロチャシ跡(東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編2001), 6: 尾白内(千代ほか1981), 7: 鶯ノ木4(森町教育委員会編2006)]

群期、北大 I 式に一般的となる特徴である（図 182-1）。また文様モチーフでは、胴部上半の鋸歯状モチーフには多くの例があり（図 182-2），曲線から直線へという変遷が指摘されている（大沼 1982）。後北 C₂-D 式でも新しい段階に位置付けられるのはおおよそ異論がなかろう。鈴木による一連の編年研究（鈴木 1998；1999；2003）は、当該期の土器群の全容を把握する試みであり、高く評価されるべきものである。これに依拠すると、後北 C₂-D 式でも末葉、鈴木の「新 2」段階に本例を位置付けられよう。以下、型式学的変遷を理解する上で注目されるいくつかの特徴について触れたい。

道央石狩低地帯の後北 C₂-D 式では、口唇は尖り気味に整えられ、端部にキザミが施されるのが一般的である。その後円形・刺突土器群期になるとキザミがなくなり、端部に平坦な面をもつものが一般化する。本例の口唇については、形態や調整の仕方において尖り気味のものからの型式学的変遷が予想され、両者の中間的な様相を示していると言えよう。

上面観は、口縁部突起に対応し歪んでいる。道央石狩低地帯の後北式において、4 単位を基本としながらも、大きさや小突起の付加など、口縁部突起は必ずしも均等ではない。編年的には、後北 C₁ 式など前の時期から例があり（図 182-4），注口や片口に対応し文様割付との関係も指摘されている（林 1988）。本例は注口や片口といった明確に機能的な部位が付加されてはいないが、実測図正面の口縁部突起は比較的明瞭で、製作者が土器の正面とその反対側を明確に意識していたことがうかがえる。また、円形・刺突文土器群期の片口鉢では、上面観が五角形ないし星形に近いものが盛行するが（図 182-3），その祖形としても本例を位置付けられよう。

文様構成では、縦の割付の区画（鈴木の言う区画文 I）がなく、さらに鋸歯状モチーフが 3 単位で構成される。道東の資料では、3 単位の例も報告されているが（図 182-5），道央石狩低地帯の後北式では、文様割付けは口縁部突起に対応した 4 単位が基本で、口縁の平縁化により、割付けが徐々に崩れていく変遷過程が指摘されている（鈴木 1998）。いずれにせよ道央石狩低地帯の資料としてはイレギュラーな存在と言える。

d. 若干の考察

(1) 胎土

多く自家生産的で粘土の採取地が製作地と想定される先史土器において、胎土は、土器の製作地を直接的に特定し得る属性の一つである。この特性を利用して、搬出・搬入についての議論が行われてきた。一方で、胎土は特

徴的な混和材といった明瞭な差異が認められる場合や、理化学的な分析を除き、客観的に情報化するのが難しい属性もある。

こうした中、本資料の胎土には、既に述べたように海綿骨針が観察され、海成粘土を生地土に使用したことがうかがえる。道内の土器において海綿骨針の含有は、主に渡島半島など道南の資料における特徴とされることが多く、道央石狩低地帯北部など近隣の遺跡ではあまり認められないⁱⁱ。

ただし道南でも、海綿骨針を含む資料のみで一遺跡の土器群が構成されているわけではない。中田裕香は、胎土から一地域に複数の粘土採取地があった可能性を論じ（中田 2002），これをもとに筆者も続縄文前半期の道南の資料について言及したことがある（松田 2010）。

当該期は集団の遊動・拡散といったダイナミックな議論が提起されている（石井 1997；1998）。集団の動向について検討を行う上で、土器の製作地をある程度限定することができ肉眼でも観察が可能な海綿骨針は、有意な属性と思われる。

(2) 粘土帯の接合方法

続縄文期の土器群において、粘土帯の接合手法は、研究史の古い段階から名取（1939）により言及され、木村英明（1975：56）により「紅葉山 33 号式」の外傾接合が指摘されてきた。近年、道央石狩低地帯において、続縄文初頭以降主体的な積み上げ手法は外傾接合であったことが明らかにされ、機能的な特徴を含め議論がなされている（鈴木・西脇 2003）。

後北式では、積み上げ工程の中止がさほど長期にわたらないためか、粘土帯の接合面が擬口縁として明確に把握される資料は多くないものの、胴部下半ないし口縁部付近において、内傾した擬口縁が確認される。

こうした中、鈴木は、道央石狩低地帯の後北式では、内傾接合を基本としつつ口縁部最終積み上げのみが外傾接合になること、そしてこの口縁部外傾接合が後北 C₁ 期には道南にも波及すると言及し、地域間における集団の交流のあり方に議論を展開している（鈴木 2009：406-422-43）。

しかし一方で、この口縁部のみの外傾接合を、道央石狩低地帯に在地のものとする鈴木の評価には、若干検討の余地があるのも事実である。粘土帯の接合は、器壁の積み上げ作業が中断され擬口縁が形成されない限り、そもそも観察・検証がしがたい属性である（佐原・都出 1983：34-35）。後北 C₁ 式や後北 C₂-D 式になると、積み上げの工程がさらに連続的なものになったことが推測され、道央石狩低地帯の資料で擬口縁はより観察されなく

なる。また、こうした口縁部のみの外傾接合は、森町尾白内貝塚（千代ほか 1981）など道南の続縄文初頭の資料においても報告例がある（図 182-6）。その後恵山式では内傾接合が主体的な接合手法と指摘されてきたが、恵山末の資料など胴部上半に外傾した擬口縁が観察される資料もあり（図 182-7），こうした技術が道南元来在地のものとして評価できる可能性も残されている。

成形技術は、土器の様々な属性においても質的な差異が注目され、「固定的な表現方法」（小杉 1984；1995）あるいは「covert element」（林 1990 a）などと呼ばれ検討がなされてきた。成形技術を「内在的属性」とする鈴木の評価も、同様の視点によるものと言える。鈴木の議論は、土器型式圈交替の背景にある集団の動向という、当該期の大きな考古学的様相の変化を解釈するものであり、基礎となる資料の提示を含め、より具体的かつ検証可能な形での議論の提起が必要と思われる。

（3）底部の成形

道央石狩低地帯において、土器の底部は続縄文初頭以来、上げ底が長く一般的なものである。その後、後北 C₁ 期には高台部が二重・三重の同心円状に複雑化したもののが出現し、後北 C₂-D 期には平底化が急速に進行する。

後北 A 式以降、底部に丁寧な調整が施されるため、その成形手法は判然としなくなるが、続縄文初頭～江別太式の資料においては、底部粘土板の外底面に粘土紐を付加し高台部とする成形手法がはっきりとうかがえる。底部形態の変遷過程を見ると、基本的には同様の成形手法によると思われ、高台部作出のため付加される粘土紐が徐々に細いものになり、後北 C₂-D 式の平底に至ると推測される。

しかし、こうした成形技術については、連続的な積み上げが行われた場合、断面観察によっても底部全体の製作手法の復元は困難である。本例のように後北式では、底部製作手法含め、製作手法上不明な点が多い。器壁断面の顕微鏡観察（高橋謙 1993）など、新たな分析手法の開発と実践が必要とされよう。

（4）文様構成の変遷

既に述べたように後北式は、貼付文の発達度合いから編年がなされ、刺突など他の文様要素や器種構成の変化が指摘された（河野 1933；1959）。その後後北 C₁ 式から後北 C₂ 式になると、文様モチーフの描出が微隆起貼付から縄文に変化することが明らかにされ（大沼 1982），近年では文様割付け原理も検討がなされている。

ここで、当該期の土器群の胴部文様を構成する要素を、「地紋」と「紋様」，さらに後者を「描出要素」「付加要素」「充填要素」に区分して整理したい。「地紋」は独立した

表 134 文様構成要素の変遷

構成要素の区分	後北 B 期	後北 C ₁ 期	後北 C ₂ -D 期	円形・刺突文土器群期
地紋	長条縄文	長条縄文	—	—
紋様 描出要素 付加要素 充填要素	粘土紐貼付 刺突（爪形） —	微隆起貼付 — 刺突	長条縊文 微隆起貼付 刺突	長条縊文 刺突 微隆起貼付

モチーフを作らぬのに対し、「紋様」はモチーフを作るものである。紋様のうちモチーフを最初に形成するものを「描出要素」とする。「付加要素」は、モチーフに沿うなど施文のあり方が描出要素に強く制限されているもの、それに比べ、「充填要素」は、モチーフの空隙に充填される独立した刺突列など、より独立性が強いものである。本例で言えば、描出要素は長条縊文、付加要素は刺突、地紋と充填要素はないとして整理される。

これらを通時に整理すると、粘土紐貼付や刺突といった個別の文様要素の形態だけではなく、文様構成上の位置付けも変化したことがうかがえる（表 134）。個別資料においては、代替表現や無文など当てはまらないものもあるが、地紋の要素が後北 C₂-D 期になると失われ、描出要素が微隆起貼付から長条縊文に、充填要素であった刺突が付加要素となり、独立したモチーフを構成しなくなることなど、時間的な変遷傾向がうかがえる。

本例は、既に述べたように刺突が付加要素として長条縊文に沿い文様が構成される。これは後北 C₂-D 式の資料として見た場合には必ずしも稀ではないが、前時期からの型式学的変遷で把握すると、後の円形・刺突文土器群期につながる変化であることがわかる。こうした文様構成上の位置付けの変化や、個別資料における代替関係を基に、円形・刺突文土器群期、北大 I 式に見られる微隆起貼付の繁縝化などを理解しうるようと思われる。

e. おわりに

1 個体の資料をもとに、当該期の研究状況について私見を述べてきた。それぞれ、先行研究の批判に終始した感があるが、今後稿を改め議論を提起することにより、筆者自身の責を果たしたい。

付記

昨春 3 月、筆者に續縊文研究への関心を導き下さり、退官後も折に触れてご指導をいただいた林謙作先生が亡くなられた。これまでの学恩に感謝申し上げ、謹んでご冥福をお祈りする次第である。

i ただし突瘤文がそもそも全ての個体に伴うものではないこと

は、当初より指摘されている（河野 1959：32）。当時の資料や編年的見解の制約を考慮しても、一つの土器型式が多様なタイプにより構成されるものとして把握されていたことがうかがえる。
ii なお、海綿骨針を含む資料については、縄文晚期の資料で地域的な様相が検討されたことがある（西田 1994）。当該期の土器群では、理化学的な分析により産地を特定する試みがなされてきた（井上 1995）。

引用文献

- 石井淳 1997「北日本における後北 C₂-D 式期の集団様相」『物質文化』No.63 23-35 頁 物質文化研究会
 石井淳 1998「後北式期における生業の転換」『考古学ジャーナル』No.439 15-20 頁 ニューサイエンス社
 伊東信雄・須藤隆編 1982『瀬野遺跡』東北考古学会
 井上雅孝 1995「海綿骨針を含む縄文土器について」菅原文也先生還暦記念論集刊行会編『みちのく発掘』289-304 頁 同記念論集刊行会
 上野秀一・加藤邦雄編 1987『K 135 遺跡 4 丁目地点 5 丁目地点』（札幌市文化財調査報告書 X X X）札幌市教育委員会
 大沼忠春 1982「後北式土器」澤四郎・加藤晋平編『縄文土器大成』第 5 卷 127-29 頁 講談社
 木村英明 1975『統縄文時代の墓壙群の研究』〔資料編〕紅葉山 33 号 遺跡調査団／石狩町教育委員会
 熊木俊朗 1997「宇津内式土器の編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 15 号 1-38 頁 東京大学
 熊木俊朗 2000「青森県八戸市出土「北大式」注口土器の再紹介」『北方探求』第 2 号 6-11 頁 北方懇話会
 熊木俊朗 2001「後北 C₂-D 式土器の展開と地域差」東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編『トコロチャシリ跡遺跡』176-217 頁 東京大学大学院人文社会系研究科
 河野広道 1933「北海道式薄手縄紋土器群」犀川会編『北海道原始文化聚英』16-18 頁 原始文化工藝社
 河野広道 1959「北海道の土器」『郷土の科学』No.23 27-42 頁
 小杉康 1984「物質的事象としての搬出・搬入、模倣製作」『駿台史学』第 60 号 160-72 頁 駿台史学会
 小杉康 1995「文化制度としての模倣製作」飛騨考古学会編『飛騨と考古学』35-76 頁 飛騨考古学会
 財団法人北海道埋蔵文化財センター編 1998『千歳市ユカンボシ C 15 遺跡(1)』（北埋調報 128）財団法人北海道埋蔵文化財センター
 斎藤傑 1967「擦文文化初頭の問題」『古代文化』第 19 卷 5 号 77-84 頁 古代学協会
 柳田朋広 2009「北大式土器の型式編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』第 23 号 39-92 頁 東京大学
 佐原真・都出比呂志 1986「弥生土器の製作技術」金関恕・佐原真編『弥生文化の研究』第 3 卷 27-51 頁 雄山閣
 鈴木信 1998「X-3 I 黒層の土器について」財団法人北海道埋蔵文化財センター編『千歳市ユカンボシ C 15 遺跡(1)』（北埋調報 128）329-39 頁 財団法人北海道埋蔵文化財センター
 鈴木信 1999「北大式期以降の墓制について」日本考古学協会 1999 年度釧路大会実行委員会編『海峡と北の考古学』（資料集 II）255-86 頁 同大会実行委員会
 鈴木信 2003「VII-3 道央部における統縄文土器の編年」財団法人北海道埋蔵文化財センター編『千歳市ユカンボシ C 15 遺跡(6)』（北埋調報 192）410-52 頁 財団法人北海道埋蔵文化財センター
 鈴木信 2009「統縄文文化における物質文化転移の構造」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 152 集 401-40 頁 国立歴史民俗博物館
 鈴木信・西脇対名夫 2003「北海道縄文晚期後葉の土器製作技法について」立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集』III 125-42 頁 同論集刊行会
 高倉純・松田宏介 2009「北海道白糠町河原遺跡出土資料の再検討とその評価」『北大史学』第 49 号 1-11 頁 北大史学会
 高橋護 1993「器壁中の接合痕跡について」坪井清足さんの古稀を祝う会編『論苑考古学』415-36 頁 天山社
 高橋正勝 1984「北海道中央部の統縄文時代」野村崇編『北海道の研究』第 1 卷（考古篇 I）355-84 頁 清文堂
 千代肇・三浦孝一・石本省三・長谷部一弘・山田悟郎・西本豊弘 1981『尾白内』森町教育委員会
 中田裕香 2002「IV-2-(3) 後北 C₁ 式について」財団法人北海道埋蔵文化財センター編『八雲町野田生 2 遺跡』（北埋調報 167）212 頁 財団法人北海道埋蔵文化財センター
 名取武光 1939「北海道の土器」長坂金雄編『人類学・先史学講座』第十卷 1-42 頁 雄山閣
 西田泰民 1994「東北北部における海綿骨針含有土器」林謙作編『縄文晚期前葉－中葉の広域編年』（文部省科学研究費（総合 A）研究成果報告書）22-24 頁 北海道大学文学部
 林謙作 1988「II-3-(2)-1 土器」吉崎昌一・岡田淳子編『北大構内の遺跡』6 26-35 頁 北海道大学
 林謙作 1990 a「素山上層式の再検討」伊東信雄先生追悼論文集刊行会編『伊東信雄先生追悼 考古学古代史論叢』105-62 頁 今野印刷
 林謙作 1990 b「連載講座縄紋時代史 6. 縄文土器の型式(1)」『季刊考古学』第 32 号 85-92 頁 雄山閣
 松田宏介 2004「旧豊平川右岸丘陵地出土土器群の検討」『北大植物園資料目録』（所蔵考古資料目録 1）1-67 頁 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園
 松田宏介 2010「土器から見た小幌洞窟遺跡」小杉康編『噴火湾北岸の人類遺跡と縄文エコミュージアム』14 頁 北海道大学院文学研究科北方文化論講座
 松田宏介・青野友哉 2003「豊浦町礼文華遺跡出土土器群の再検討」『日本考古学』第 16 号 93-110 頁 日本考古学協会
 森町教育委員会編 2006『鶯ノ木 4 遺跡』（茅部郡森町埋蔵文化財調査報告書）森町教育委員会
 山内清男 1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
 吉崎昌一・岡田淳子編 1987『北大構内の遺跡』5 北海道大学
 吉崎昌一・岡田淳子編 1988『北大構内の遺跡』6 北海道大学
 吉崎昌一・直井孝一・松岡達郎編 1979『聖山』七飯町教育委員会